

後期：アジアのキリスト教思想

A. 日本のキリスト教思想 B. 研究発表 C. アジアのキリスト教思想

<前回>南アジアのキリスト教

この100年間に限定して言えば、インドを例外として南アジアのほとんどの国における宗教状況は、程度の差はあれ、ゆるやかな一元化に向かいつつある。インドではヒンドゥー教徒が圧倒的な多数を占めることは言うまでもないが、この100年間に於いて宗教的多元化は少しずつ進展し、キリスト教徒も300万人あまりから5000万人に迫る状況にある。

A. インドのキリスト教アシュラムーインド・キリスト教の土着化ー

(1) インド・キリスト教史の概観

1. 伝説：トマスの宣教

・インド南部のケララ州マラバル地方の教会伝承によれば、キリスト教は使徒トマスによって紀元52年にもたらされたと伝えられている。

2. シリア正教会

・インドのシリア正教会は16世紀に至るまで、インドでの唯一のキリスト教であったが、周辺の地域共同体と人種的そして文化的に同質であり、またヒンドゥーの支配者の庇護を受けるなど、他の宗教的なコミュニティと平和的に共存していた。

3. ローマ・カトリック教会

1498年にヴァスコ・ダ・ガマはインド南西のカリカットに到着したが、ポルトガルは香辛料交易を独占しつつインドのポルトガル化を基本とした植民地政策（パドロード政策）を押し進めた。シリア正教会など伝統的なインドの諸宗教に改宗を迫るカトリック教会の高圧的な姿勢に対して、17世紀の前半にイエズス会士ロベルト・デ・ノビリ（Roberto de Nobili）は、徹底した土着化の試みを行い、宣教師がインド人の生活様式に順応する伝道方法を展開した。しかし、このノビリの伝道方法に対しては、キリスト教のヒンドゥー教化ではないかという批判が生じ、これが以後のインドでのカトリック教会の伝道に打撃を与えることになる。

4. プロテスタント諸教派

プロテスタント教会のインド伝道は、1706年にデンマーク王派遣の宣教師によって、当時デンマークの統治下にあったコロマンデル海岸より開始された。イギリス国教会系の先駆的な宣教活動として特記すべきは、18世紀のC.F.シュヴァルツによる下層カーストであるナダル・カーストのキリスト教化である。続いて、18～19世紀には、イギリスの信仰復興運動がアメリカやヨーロッパ各地に波及するに伴って、これらの諸国から様々な宣教団体がインドでの活動を本格的に開始した。

5. 植民地化と独立後

・キリスト教はカースト制度の安定性の中で停滞していたヒンドゥー教を宗教的に覚醒させ、民族意識を含めた世俗イデオロギーの形成にも大きな影響を及ぼしたのである（ibid., pp.213-216）。こうした中より、インド社会はキリスト教や西欧列強の影響から脱して新しい民族国家の形成・独立へと向かうことになる。

・現在、インドは多宗教国家であり、法的には、すべての宗教に対して等しい保護が与えられ、国家は宗教上の問題に干渉しないという世俗主義が取られている（他の南アジアの諸国との相違）。

(2) インドの近代化とキリスト教

1. 近代インド・キリスト教史の光と影

2. インドの宗教的状況への適合と批判

①ヒンドゥー教・カースト制度に基づく社会秩序への同化・共存：ヒンドゥー教を基盤としたインド社会に適合し、その中で他宗教と共存するという関係の在り方である。これは古代以来シリア正教会がとってきたもの（ヒンドゥー教の支配者の庇護を受け、バラモン

に次ぐ高位カーストとしてのポジションを得、一カーストの宗教としてインド社会のカースト制度に適合)。こうしたインド社会への適合のもう一つの問題は、社会の諸階層間の流動性が疎外されることによって社会全体が停滞に陥ることにある。

②カースト的な伝統の否定：近代以降インドへもたらされた西欧のキリスト教、とくにプロテスタント諸教派の姿勢に典型的に見ることができる。それは西洋近代とキリスト教の普遍性あるいは優越性という前提の下で、インド社会に自らの価値観を押しつけ改宗を迫るキリスト教である(Copley,1997, 12)。

3. インドにおけるキリスト教受容

①ヒンドゥー・キリスト教：西欧的思惟においてはいわば常識的であるキリスト教と他の宗教との二分法的区別がインドには単純に適用できない、つまり、インドでは宗教的多元性に関する様々なパターンが混在している。

②世俗的運動に対する影響

・インド文化の特徴は社会生活と宗教生活の一体性にあると言われるが、キリスト教がインドの伝統的宗教に与えた影響は、宗教とは通常区別され世俗的と言われる一般の政治運動にも及んでいる。これはインドにおける新しい歴史意識あるいは人間意識の中に確認することができる(Thomas,1990, 52-55)。

インド憲法に体现された新しい理念や新しい人間理解はインドの独立に決定的役割を果たしたのであり、こうした新しいヒューマンイズムの源泉の一つがキリスト教だったのである。

(3) インド・キリスト教の創造的可能性

・修道院と世俗生活のあれかこれかの選択肢を超えて。インドより始まったキリスト教・アシュラムの運動の意義。日本においても、スタンレー・ジョーンズ(Jones, Eli Stanley, 1884-1973)によって設立されたキリスト教・アシュラムが「日本クリスチャン・アシュラム連盟」として活動しており、一定程度の紹介がなされている。

・19世紀のヒンドゥー・ルネサンスに際して、新たなヒンドゥー運動として開始された(ヒンドゥー・アシュラム)。ラーマクリシュナとその後継者ヴィヴェーカーナンダ、タゴール、そしてガンジー。

・キリスト教・アシュラムは、ヒンドゥー・アシュラムの影響下で、20世紀初頭に、まずプロテスタント・キリスト教において開始された。その後、キリスト教・アシュラムは、カトリックやシリア正教会、そして教派を越えたエキュメニカルな運動体へ広がり、多様な運動を展開。

・キリスト教・アシュラムはヒンドゥー教などの他宗教とキリスト教との宗教間対話の現場でもある。「アシュラムは、キリスト教の異なった諸教派の他に、ヒンドゥー教徒、仏教徒、ムスリムや様々な諸宗教の人々との対話によって特徴づけられている」(ibid., 105)。

・教派的な相違。 ・「キリスト教らしさ」の保持。

・キリスト教・アシュラムでは、瞑想、祈り、礼拝を中心とした共同生活において、労働や教育など様々な活動——病院、学校、農業、手工業など——が行われる(ibid., 69-87)。それは、西欧キリスト教における修道院と世俗生活とのいわば中間形態と考えることができる。人々は修道院の場合のように完全に出家するのではなく、通常は世俗生活を行いながら、必要に応じて一定の期間、霊的な指導者(グル)のもとに集まって瞑想と祈りに集中する時を過ごすのである。

B. ピエリスの解放の神学

芦名定道「キリスト教にとっての仏教の意味——近代日本・アジアの文脈から」、

日本近代仏教史研究会『近代仏教』第20号、2013年、7-19頁。

Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.

<補足>岩谷彩子『夢とミメシスの人類学——インドを生き抜く商業移動民ヴァギリ』(明石書店、2009年)。第6章「キリスト教宣教と改宗」、南インドのキリスト教受容とヴァギリ宣教／ペンテコステ派キリスト教の進出／信仰を告白するコミュニティ／改宗をみちびく夢の語り

C. アジアのキリスト教思想

15. インドネシアのキリスト教

(1) インドネシア・キリスト教の概要

<宗教状況の変遷と現状>

『世界キリスト教百科事典』(第二版)

	1900	1970	1990	1995	2000	2025
イスラーム	40.0	42.3	54.7	54.7	54.7	53.1
新宗教	10.0	37.4	22.5	22.1	21.8	19.4
キリスト教	1.4	10.3	12.8	12.9	13.1	15.7
ヒンドゥー	2.0	1.9	3.2	3.3	3.4	3.8
民俗宗教	45.6	5.5	2.8	2.7	2.5	1.8

David B.Barrett, George T.Kurian, Todd M.Johnson (eds.),

World Christian Encyclopedia. A comparative survey of churches and religions in the modern world. Vol.1 second edition, Oxford University Press, 2001.

- ・伊東定典「インドネシア」では、1971年の国勢調査で、人口1億1923万人、識字率60%
宗教統計：イスラム教87.5%、キリスト教7.5%（プロテスタント5.2%、カトリック2.3%）、ヒンドゥー教1.9%、仏教0.9%、その他2.2%。
- ・現在は、2億3000万人を超える。ブリタニカ国際年鑑（2007）では、イスラム教76.5%
（1億7000万を超える世界最大の信徒数）、キリスト教13.1%（3000万人程度）。

<インドネシア史、諸宗教とキリスト教>

1. 先史時代：民族移動(モンゴロイド系マレー人種)からヒンドゥー王国形成までの3000年間。基層文化の成立、精霊文化、オーストロネシア語あるいはマレー・ポリネシア語。

2. ヒンドゥー・仏教時代

- ・5世紀：ヒンドゥー教を信奉した王の事蹟を彫った碑文。有史時代へ。
- ・7世紀のスマトラのパレンバンのシュリウィジャヤは仏教の中心地となる。この国と同盟した中部ジャワのシャレンドラ王朝においてボロブドゥール大仏跡が建立される(9世紀)。マジャパイトは1292年に元寇を退け、全インドネシアを統一、1527年に滅亡。
- ・1000年の間に、固有の基層文化の上に、インド系の宗教を受容し、宗教文化が豊かに展開する。マジャパイトのヒンドゥー教はバリに残る。

3. イスラームとキリスト教の進出。

- ・1419年、東部ジャワにイスラム伝道者ワリの墓碑。1478年、中部ジャワの最初のイスラム教国デマク成立。
- ・オランダの東インド会社は、1641年にマラッカを陥落させ、インドネシアの制海権を確立。白人の侵略に対決するため、イスラームの旗のもとに団結が呼びかけられる。
- ・1814/15のウィーン会議で、インドネシアはオランダの統治下に置かれる。東インド政庁が植民地統治にあたる。1807年に信教の自由が宣言されカトリックがプロテスタントと対等な立場でインドネシアで布教することが可能になった。
- ・日露戦争、青年トルコ党革命、辛亥革命の影響でインドネシア民族運動が高まる。13年インド党、13年インド社会民主同盟。

4. 太平洋戦争・日本の侵略とインドネシア共和国

- ・1942年に日本軍が侵攻。1945年の日本の無条件降伏を受け、スカルノ、ハッタは共和国を宣言。49年にインドネシア連邦共和国が成立。
- ・1966年、スカルノ(1945-1967)はスハルトに政権を委譲、実質的にスハルト政権時代(1967-1998)となる。
- ・スハルト以降、ハビビ、ワヒド、メガワティ、ユドヨノ。
- ・インドネシアは憲法29条で「信教の自由」を保障。スカルノが提唱した建国5原則()パンチャシラ、憲法前文にかかげられる)では、全能の神への信仰、人道主義、インドネ

シアの統一、合議と代議制による民主主義、全インドネシア人民のための社会正義では、唯一神への信仰を第一原則としている。

5. インドネシア・キリスト教の三つの伝統

1)カトリック修道会

・ポルトガルによる布教、16世紀。イエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会の各修道会が活動。

・その後多くの修道会がインドネシアで宣教を行い、現在に至る。

2)オランダ改革派教会

・1602年に成立した東インド会社は、1677年までにポルトガル・スペインを東部インドネシアから追い出す。17世紀以降、東インド会社は、教会を設立。ドルト信条、オランダ信仰告白にたち、ハイデルベルク教理問答などを使用。しかし、17世紀から18世紀にかけて、伝道は不振に陥る。

3)敬虔主義

「敬虔主義を杖としてやっとたちあがり、プロテスタント本然の生気ををとりもどし、世界伝道へと勇躍する準備期間となったのが十八世紀末であった。一七九五年ロンドン宣教会、九七年オランダ伝道協会、一八〇四年英国聖書協会、一八一四年オランダ聖書協会などが続々設立され、「伝道の世紀」を先導してゆく」（伊東、408）。

1808年、オランダ伝道協会派遣の三人の宣教師（敬虔派ゼイスト兄弟団で実習）が派遣。

6. 現在

・インドネシア・キリスト教協議会（DGI）からPGI（dewanからPersekutuan）に改称。公同一致教会へ

1950年に4名の職員から出発し、25年後には、職員は、241名に。1984年のアンボン大会で改称。1987年で、加盟教会56、所属教会員779万人（全プロテスタントの87%）、地方教会協議会は87。

・キリスト教徒が多い州：東ヌサトゥンガ（西チモールとクローレンス）州、イリヤンジャヤ（西ニューギニア）州、東チモール（2002年に独立、99.1%がキリスト教徒）、マルク（アンボン）州など。

（2）インドネシア・キリスト教神学とその課題

7. 問題：近代化との関わり／イスラームとの関係

・「オランダ植民時代」「植民地主義・帝国主義とキリスト教が同一視されること」、シマトゥパン「宣教師によってもたらされた福音それ自体は植民地主義や帝国主義といささかの関係もない。それとは反対に、この福音宣教の結果として、未だヒンドゥー化やイスラム化されていないインドネシアのあちこちに民衆の教会が建設され始めたのであるという」（木村、158）

・「独立後のインドネシア教会は、彼らの福音理解とミッションの営みとして二つの課題を措定した。第一はインドネシアの政治社会の《変革》であり、第二は文化経済の《開発・発展》のプログラムである」、「キリスト者の奉仕の可能性はこの《変革》に由来しているのではなく、イエス・キリストご自身の内にその根拠を有しているのである。インドネシア教会は、他宗教を信じる人々と共に、インドネシア国民のあらゆる発展計画に十全に参加することが信仰の表現であり宣教の務めであることを認識した。問題はその神学と方法であった。」（160）

「開発が教会の宣教の課題であるなら、開発の動機と行為のすべては神の国と関係づけられ、神の国の裁きの下に位置づけなければならない」（162）

「民衆の周縁化はキリストの周縁化」「現代インドネシアの社会正義はインドネシア教会の宣教の主要な関心事である」（163）

・「日本軍は多くのオランダ人を勧告第8項目の違反者として捕らえ、聖職者、民間人、

婦女子などに対して、オランダ兵士と無別無く拷問を行い、裁判無しに処刑することも日常的に行った」、「日本政府がすでに批准していた国際条約の戦争法規の範囲をはるかに超えた国際法違反」、「当初から、日本軍はインドネシアのキリスト者を警戒していた」「敵のスパイ」(175)

「いくつかの地域で日本軍が諸教会に強制したキリスト教連合会の組織化は、皮肉なことに、教派主義を乗り越え、エキュメニカルな意識の高揚をもたらした」(189)

「それどころか私たちは、特に、日本基督教団派遣牧師の存在と行動について一定の判断をする必要がある。日本基督教団派遣牧師と彼らを派遣した教団は「大日本帝国」が進めつつあった「八紘一宇」のイデオロギーによる「大東亜共栄圏」確立のための戦争政策に組み込まれた。とは言え、彼らはインドネシアに生じている教会の惨状を信仰と善意のゆえに座視できなかったこともまた事実であろう」(190)

8. 神学の三つの潮流

1) 開発

・ T. B. シマトゥパン (Tahi Bonar Simatupang, 1920-1992)

バタック・プロテスタント教会の著名な信徒神学者。日本敗戦二ヶ月後のインドネシア人メイン治安軍の参謀本部組織部長に就任、49年12月にハーグ円卓会議インドネシア共和国全権団軍事委員として出席、1951年から参謀総長。しかし、1959年に陸軍中將の位で軍を退役(39歳)、この年に、インドネシア・キリスト教協議会議長、ジャカルタ・キリスト大学の理事長など。

「経済社会開発に参加するキリスト者の信仰と理解について、シマトゥパンが注目するのは、苦難、困窮、抑圧などのあらゆる不正形態から人間を解放することを強調するペマタン・シアンタール宣言」「それは社会変革に参加するインドネシアのキリスト者に一定の指針を与えた」、「開発の性格に対し民衆の福利という方向と内容を与えねばならない」(232)、「インドネシアのキリスト者は、貧困と後進性と社会的不正から自らを解放しようとする民衆の努力のただ中で、真実の解放とは何かを指し示すよう招かれている」(233)、「「二重の取り組み」という宣教論的概念」「教会は、一方において自己の周辺世界、すなわち社会・文化問題と取り組まねばならず、他方において、神の言葉と取り組まねばならない」「教会の課題を、この神学協議会は切り離しのきかない二重構造として理解した。」(235)

・ ブロト・スメディ・ウィリヨテノヨ (Broto Semedi Wiryoteno, 1930-)

「人の生と歴史が人間の救いを意志する神の《救済の場》であるなら、ブロトによれば、教会は人間の生と歴史の中に自らの務めを持つことになる」「人間の生の中へと向かう教会の参与は・・・神の救済に応答する人間の参与であり、その救済を具現化する人間の参与である。」(248)

2) 対話

・ ヴィクトール・ターニャ (1936-)

「インドネシアのキリスト者にとって、インドネシア総人口の85%はと隣り人としてのイスラム教徒である」、「ターニャによれば、「宗教の神学」が確かに教会のうちは向けての有効性を持つが、信仰を異にする者たちとの対話は」「現象学的方法による神学がより有効とされる」「対話の神学」(273)、「諸教会ではいまだイスラムの希望を解さない「説教」が横行している」(274)、「神学は基本的に対話の神学であるべきであり、教会は諸宗教との対話の中で自らの信仰を教義化すべきなのだ」(275)

3) 解放

・ J. L. C. アビネノ (Johannes Ludwig Chrisotomus Abineno, 1917-1995)

インドネシア教会のエキュメニカル運動の推進者、ジャカルタ神学大学の教授。

「第一に、聖書が物語る解放とは人間生活の全体を網羅する救済であると理解」、「第二に」「神にある解放はすべての人々にとって意味と関連をもつものと理解する」、「出エジプト」「政治的解放、すなわち抑圧、苦難、不正からの解放であった」、「神はイスラエル

が神の意志を実現する聖なるひとつの民となるようにと、彼らを解放されたのである」、
「ひとつの神の民となる解放」「救済は正義の実現なしには生起しない」(302)、「解放は
全人類に向けられていると主張する」(303)、「貧しく抑圧された人々を神ヤハウェはイス
ラエルをエジプトの地から《解放》し、彼らを《一つの民》とした。」(304)

・「マリアンネ・カトッポ (Marianne Katoppo)」「女性解放のマリア論」

「マリアこそ全く解放された人間なのである。マリアは神経験と人間性に対する関心とを
真に具現した女性である」、「フェミニスト神学者を含めた多くのフェミニストたちはマ
リアの模範を否定する。それは、マリアのイメージがはじめは封建主義に、後には資本主
義によって形作られていった歴史があるからである。しかしカトッポは、封建主義と資本
主義に適合された伝統的なマリアのイメージに関する教会の理解を否定する。マリアの絵
画や聖像のイメージは通常、甘い微笑みを浮かべ、「かよわく、うつむいた瞳というのが
相場である。・・・カトッポのマリア論は、マリアに、他の人に従属しない全く自由な人
間の創造的従順を見る。それは主への従順である。カトッポはこれを、アブラハムやモー
セの従順に類比する。」(333)

<参考文献>

1. 伊東定典「インドネシア」(日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』
日本基督教団出版局、1991年、379-431頁)。
2. 木村公一『インドネシア教会の宣教と神学——開発と対話と解放の神学の間で』
新教出版社、2004年。
3. 寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』めこん、2002年。